The history of Sino-Japanese muri ‘no reason’ through the corpora
Keiko Takahashi (Toyo University)
Yuko Higashiizumi (Meiji University)

要旨
漢語名詞「無理」は、15 世紀頃には「理(ことわり)無し」という文字通りの意味であったが、17 世紀頃には「強引な」「不可能な」という意味でも用いられるようになってきた。さらに、現代に入り、文法的接辞を伴わない「無理」の裸の形式や「無理無理」などの反復形式による、断り・不承諾の意味を表す応答表現としての用法や副詞用法が観察されるようになる。また、インターネットを中心に「耐えきれないほど素晴らしい」というプラスの意味の用法も出現してきた。このような「無理」の歴史を各種コーパスからとどり、語用論的標識の発達という観点から考察した。(264 字)

1. はじめに
現代日本語における漢語「無理」という語の意味として、『広辞苑第七版』(2018) は(1)に示す 3 種類を記述している。『デジタル大辞泉』『大辞林』の記述もほぼ同様である。品詞は、後二者は名詞・形容動詞とするが、形容動詞を認めない前者は名詞としている。

(1) a. 道理のないこと。理由のたたないこと。「無理を通す」「無理を言う」「怒るのも無理はない」
b. 強いて行うこと。「無理をして体をこわす」「無理に連れ出す」
c. 行いにくいこと。するのが困難なこと。「無理な願い」「子供には無理だ」

また、現代語の「無理」には(2)・(3)のような意味・用法もある。用例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)』(コーパス検索アプリケーション『中納言』)のものである。

(2) a. メダルなしより「疲労骨折」の川崎選手を、üsü起用した星野「元」監督に・・・喝！だぁ〜() _ ()
【出典】BCCWJ, サンプル ID : OY02_00359, Yahoo!ブログ, 2008 年
b. 他きてもつくってのを無理引き止めるわけにゆかなかったで、「お前良か如せろ」も言たわけよ。
【出典】BCCWJ, サンプル ID : LBb9_00030, 吉田司(著)『下下戦記』, 1987 年
c. だけどそんなようなものはみんななかため、こう寄せ集めて、わかり簡 metabolize しまうと三つになっちゃうわけですね。

1 引用は、表記など改めた箇所がある。下線も、稿者によるものである。以下同じ。
【出典】BCCWJ, サンプル ID : OB1X_00242, 坂東義教(著)『坂東先生の教育講座』, 1980 年

(3) a. 「お前、しっかりしろよ」「無理」「お前、飯くらい食えよ」「無理」「お前、少ぐらい寝ろよ」「無理」
【出典】BCCWJ, サンプル ID : OB6X_00247, 金原ひとみ(著)『蛇にピアス』, 2004 年

b. 昨日クマクマさんが、予約注文の梅二十キロを運んで来た。「ついでにお砂糖4キロ買ってきた答え」と並列リババの声に。「無理理由、自転車がつぶれるヨー」
【出典】BCCWJ, サンプル ID : OY05_01089, Yahoo!ブログ, 2008 年

c. あいのりの「おまみきつつい・・・・？！あなたは、どう思う？！無理！！
近くにいたらかなりウザイ！！！！！！！！！！！
【出典】BCCWJ, サンプル ID : OC01_00608, Yahoo!知恵袋, 2005 年

(2a)・(2b)は「無理」単独、(2c)は「無理無理」という反復形式で、いずれも前文として用いられている例である。同じく前文用法である (1b)「無理に」が「に」を伴った形式であるのに対し、(2)は「無理」という「裸の形式」である。以下、本発表では活用語尾・助動詞・助動詞など文法的機能を無する接尾辞を伴わない形式を「裸の形式」と呼ぶ。また、表記は漢字で表記される。

(3)は、「無理」が「裸の形式」で「応答表現」3として用いられている例である。(3a)は単独、(3b)は反復文例である。これらは「できる」という意味で、命令・指示・依頼などを対する断り・拒絶として機能している。また、(3c)は、「我慢できない、耐えられない、いやだ」という意味である。これについて、『三省堂国語辞典』は第7版から(4)のように説明している。さらに、インターネット上には(5)のような記述もある。否定的意味を持つ表現が肯定的意味に転じる点は、「ヤバい」などに通じ、興味深い。

なお、管見では、(3a)・(4)を除き、(2)・(3a)・(3b)・(5)の意味・用法を記述した辞典は見当たらない。

(4) むり【無理】(名・自サ・形動ダ) 4.(俗)いやなようす。受け入れられないようす。「女子を呼び捨てにする男子って、無理！」 『三省堂国語辞典』第七版 (2014)

(5) 【無理(むり)】意味：喜びが極まり、キャバオーパー。
逆説型の否定語。「好きなアイドルのライブに行くのが登場すると、「えっえっ無理って無理しだこ、えっだと混乱ながら無理を連発してしまう」(23歳・会社員)など、「しんどい」など顔義言語と6合わせて使われることも多い。「無理無理無理無理無理」と反復されると、さらに強調される。

2 (2a)は「無理起用」という(臨時的な)複合名詞、(2b)は地域方言に由来する可能性もある。
3 「応答表現」の本義における定義は3節で述べる。
4 このような「無理」の意味・用法については、テレビ朝日によるウェブサイト「アナウンサーズ」内の「日本語研究室」においても取り上げられている。
5 (3c)や(5)の意味の LINE スタンプも多数ある。ご教示くださった山本ゆうかさんに感謝申し上げます。
6 原文のまま。
本発表では、コーパス所収の「無理」の用例をとどまり、(2)~(5)のような現代語の意味・用法に至る歴史の一端を探る。

２．先行研究
近年注目を集めている研究分野に、歴史語用論(historical pragmatics)・歴史社会言語学(historical sociolinguistics)・歴史社会語用論(historical sociopragmatics)がある。これらは、個々に行われてきたことばの歴史的考察に、社会言語学や語用論の視点や方法を取り入れ、ことばの変化を、社会的・文化的背景、コミュニケーションにおけることばの使用と関連づけながら探求する研究領域である(Jucker and Taavitsainen (eds.), 高田他編2011, 高田他編2015, 椎名2016, 高田他編2018など)。

これらの分野の主要な研究テーマの一つに、語用論的標識(pragmatic markers)の歴史的発達がある7。語用論的標識とは、発話において命題内容以外の対人的かつテキスト的機能を持つ要素である8。日本語における語用論的標識の歴史的発達の研究は、「やっぱり(り)」「だって」「わけ」「って」など和語を中心に行われてきた9。一方、漢語についても「実際」「事実」「相当」「段分」「道理」などの和語系の発展にともなう語用論的標識の発達が報告されている(三枝2013, 趙2013, 嘉海2015, 柿崎2017, Shibasaki2018, 2019a, 2019bなど)。


本発表では、漢語名詞由来の「無理」の歴史を調査し、語用論的標識の発達という観点から考察する。

7 「語用論的標識」の訳は、澤田他(訳)(2018), 椎名(監訳)(2020)による。語用論的標識は、話題標識(dialogue markers)、談話不変化詞(dialogue particles)などとも呼ばれる(澤田他(訳)2018: 54)。
8 語用論的標識の定義・機能、研究背景などについては、Brinton(2017: 2–11)が詳しい。
9 これらの例は Shinzato (2017: 308)のTable1による。
3. 国語・漢和辞典における「無理」の歴史

『大漢和辞典』『日本国語辞典第二版』『角川古語辞典』『時代別国語大辞典室町時代編』『新明解語源辞典』の「無理」の記述をまとめると(6)のようになる。

(6) a. 道理に反すること。筋が通っていないこと。また、そのさま。

・韓愈「答柳柳州食餌憂詩」(819)「鳴声相呼和、無理祇取閑」
・文明本節用集(1474)「無理　ムリ」
・史記抄(1477)一五・竜田「寛要灌夫二公は、無理なる罪に逢たぞ」
・和漢通用集(1596–1644)「無理　むり　道理なき也」
・日葡辞書(1603–04)「Muri (ムリ)、クトヲリ ナシ」

b. いいて行なうこと。強引に事をなすこと。道理のないことや相手に受け入れる気のないことなど、実現不可能ないし実現困難なことを強引に行うさま。また、そのさま。

・顔氏家訓(600 頃) 省事「若横生図計、無理請誨、非吾教也」
・三国伝記(1407–46 頃か) 一六・「地獄を作りて、囚人を獄率と為し、無理
に罪人を追す」
・史記抄(1477) 呂不韋伝「無理的な所望をしたぞ。此姫を我にくれよと云ぞ」

c. 困難である。できない。

・評判記・渋野老(1662) 跡「かかるごはしつむらの口はあくが無理
なれども、ただうちあらこられたる玉のきずをのみしをするなれど」
・樫記・享保二(1727)・間一・二八「(ソノ書ノ流儀ハ、柵書カラデナヤク)
先(まず)草・行から習ひ初めにむりなるべき事也」
・黄表紙・江戸生師気橋焼(1785) 下「名にながれたるすみだ川、たがいにむ
りを五百崎の、錦は四つ目や長命寺」

(6)からは、「無理」という語は漢詩文に由来する漢語であり、室町時代には(6a)・(6b)の意味で用いられ、江戸時代以降(6c)の意味が出現し始めたことが見てとれる。

ただし、いずれの辞典も「無理」の原義は字義どおりの(6a)とするが、用例は(6b)のほうが早い。さらなる用例の発見が期待される。

4. リサーチ・クエスチョンおよび調査方法

「無理」の語の歴史のうち、本発表では、(2)・(3)・(5)にあげたような副詞や応答表現としての用法の、出現しない或萌芽の時期を探ることを目指にする。

表 1 は、調査に用いるコーパスをまとめたものである。いずれのコーパスも国立国語研究所コーパス開発センターによる。検索は、コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用し、語彙素「無理」をキーに指定した。検索時期は、2020年6月～8月である。

<table>
<thead>
<tr>
<th>コーパス名</th>
<th>収録年代</th>
<th>記号・補助記号・空白を除いた検索対象語数</th>
<th>データバージョン</th>
<th>中納言</th>
</tr>
</thead>
</table>

10 長澤(編)(1975: 157)の訓点に従って書き下すと(i)のようになる。

(i) 鳴声相呼て和す 束無く祇取ふを取る
| 日本語歴史コーパス( Corpus of Historical Japanese: CHJ) | 8c頃–1947 | 16,866,309 | 2020.03 | 2.5.2 |
| 現日研・職場談話コーパス( Gen-Nichi-Ken Corpus of Workplace Conversation: CWPC) (現代日本語研究会(編)2011) | 1993–2000 | 186,906 | 2018.03 | 2.4.2 |
| 名大会話コーパス(Nagoya University Conversation Corpus: NUCC) (藤村他2011) | 2001–2003 | 1,131,971 | 2018.02 | 2.4.2 |

5. 調査結果

5.1 室町・江戸時代の「無理」の用例

CHJでは、奈良・平安・鎌倉時代の「無理」の用例は見当たらない。表2は、室町・江戸時代の「無理」の用例を時代別・サブコーパス別にまとめたものである。最も早い例は(7a)で、意味は(1a)である。最多の例は(7b)のような「無理に」の形式の副詞用法である。

<table>
<thead>
<tr>
<th>用法</th>
<th>形式</th>
<th>室町</th>
<th>江戸</th>
<th>計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>連体修飾</td>
<td>無理な</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>無理なる</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>副詞</td>
<td>無理に</td>
<td>0</td>
<td>47</td>
<td>3</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無体に</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>名詞</td>
<td>無理+無助詞</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+格助詞</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+副助詞</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>述語</td>
<td>無理+copula</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+終助詞</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>複合名詞</td>
<td>無理酒など</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>意味・用法不明</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>1</td>
<td>56</td>
<td>10</td>
<td>56</td>
<td>122</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(7) a. 平家の悪行はこればかりでも御座無い、その上無理な位争いをして、数多の人々を越えて次男宗盛右大夫と言う官に上がられた。
【出典】CHJ サンプル ID: 40-天平 1592_01003, 『天草版平家物語』, 1592年

11 表2における「無理+無助詞」は5例とも動詞「言う」が後続している。
12 表2における複合名詞17例の内訳は、無理酒・無理難題各4例、無理非道2例、無理起請・無理隠居・無理・無理止め・無理飲み・無理死に・無理過言各1例である。
b. しゅうようこびて、太郎くわじやにさせてみたがるを、いやがれども、無理にきて、

【出典】CHJ サンプル ID：40-虎明 1642_01016, 『虎明本狂言集』「隠笠」,
1642年

これらの全245例には、本発表の目的とする現代語の副詞や応答表現の用法とのかかわりは、現時点では見いだせない。

5.2 近代の「無理」の用例

表3は、CHJにおける近代の「無理」の用例を時代別・サブコーパス別にまとめたものである。江戸時代までと比べ、用法も形式も多様化してきたことが観察できる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>用法</th>
<th>形式</th>
<th>明治</th>
<th>大正</th>
<th>昭和</th>
<th>計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>連体修飾</td>
<td>無理な</td>
<td>12</td>
<td>25</td>
<td>37</td>
<td>75</td>
<td>7.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理なる</td>
<td>0</td>
<td>32</td>
<td>5</td>
<td>37</td>
<td>3.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理の</td>
<td>2</td>
<td>13</td>
<td>7</td>
<td>22</td>
<td>2.2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無体な</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>副詞</td>
<td>無理に</td>
<td>7</td>
<td>116</td>
<td>2</td>
<td>105</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無体に</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>0</td>
<td>7</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無残に</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理往生に</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理に</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無性に</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理槍に</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理押しに</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理から</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>動詞</td>
<td>無理する</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理押しする</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理強いる</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>名詞</td>
<td>無理+無助詞</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>0.4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+格助詞</td>
<td>2</td>
<td>49</td>
<td>89</td>
<td>140</td>
<td>13.9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+副助詞</td>
<td>1</td>
<td>62</td>
<td>2</td>
<td>105</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>述語</td>
<td>無理+copula</td>
<td>5</td>
<td>116</td>
<td>1</td>
<td>80</td>
<td>3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13 表3における「無理+無助詞」に後続する語は、「言ふ」「あり」「なし」「至極なり」各1例である。
表3から読み取れる近代の「無理」の特徴としては、副詞用法に多様な形式が出現していること、副詞用法と述語用法が拮抗する割合を占めていること、サ変動詞の用法が出現していることが挙げられる。

応答表現の用法はまだ見出せない。ただし、(8a)・(8b)の用例は、次節で見る(12a)などに近く、「無理」を用いた応答表現の萌芽と見なせともいう。

また、副詞用法には「無理無理に」という反復形式が(8c)の1例見出された。これ以外にも、「無理無体に」「無理無体性」「無理無性に」「無理無しに」といった準反復形式もある。ただし、裸の形式は見られない。

(8) a. 「なぜ否だ。あんな好い学校。」「教師が不公平です。問題を残らず答へを書いたのに落第させました。」「それは無理だな。」「本を見て答へを書いたんですもの、皆よく遣りました。」

【出典】CHJ サンプル, ID: 60M 太陽 1895_09056, 『太陽』, 1895年

b. 『俺ねも釣れるらうかね?』と海男は満面に訊いた。『そうやね、少し無理やね、何せ十五六駆も深いところから釣りあげるのやし、第一道具の操縦が出来んないね。』

【出典】CHJ, サンプル ID: 60M 太陽 1917_04040, 『太陽』, 1917年
c. 末端と開校といふ前月下旬に入つても、志願者タツタ二十五人！これではならぬと、一同血眼になり、規則書を賃引に来る者は片端から引き止めて、無理無里にも入学の手続きをさせ、やっと七十数名を帳簿の上に見たのである。

【出典】CHJ, サンプル ID: 60M 女世 1909_16018, 『女世世界』, 1909年

なお、『日本国語大辞典第二版』には裸の形式の例として(9a)・(9b)・(9c)が挙げられている。(9a)が江戸時代における例であるかどうかをさらに調査を進めなければ判断できないが、『角川英和辞典』によればこの例は「やり梅」と掛けた技巧であるという。

---

14 表3における述語「無理」2例は、「武富だけは申分のない男たちが、高田は今更政敵の人々が無理、他の仲人の中はモウ頭が利かぬようになって居る人達ばかりじゃないか。」(CHJ, サンプル ID: 60M 太陽 1917_10007, 前田亜山(作)「外交調査会消息」, 1917年)、「横田が最近に於ける無理の初めは高橋内閣改造計画だ。略無理無理、天下の大無理と云ふものだよ。」(CHJ, サンプル ID: 60M 太陽 1925_04026, 前田亜山(作)「政界鬼気」, 1925年)である。

15 表3における複合名詞65例の内訳は、無理非道13例、無理算段12例、無理無道も10例、無理小道7例、無理難題3例、無理強い、無理死絶各2例、無理非道・無理不自然・無理手段・無理強い・無理こじつけ・無理無茶苦・無理業・無理筋・無理手段・無理押し・無理押付・無理隠居・無理暇・無理注文・無理募集・無理問合各1例である。
このような副詞用法の裸の形式や反復形式が、現代語の(3)・(5)のような裸の形式の応答表現の出現に関連するかどうかは、現時点では判断できない。ただし、「無理無理」のアクセントの点では、副詞用法は「HLLL」と一語化しているが、応答表現用法は「HLHL」であり、語彙化は副詞用法が先行している。これは、ここまでのコーパス調査の結果と矛盾しない。今後、今回の調査対象以外のコーパスやデータベースの用例を調査し、詳細を探ってゆく必要がある。

5.3 現代語会話コーパスにおける「無理」の用例
表4は、現代語の会話コーパスの「無理」の用例をまとめたものである。本稿で見いだそうと努めてきた「無理」の応答表現の用法や反復形式は、現代に入って広まってきた、新しい用法であることがわかる。反復形式は、応答表現の用法のほか、副詞用法や述語用法にも見られる。ただし、「無理」を3回以上反復する形式は、述語用法および応答表現の用法のみであり、副詞用法には見られない。

<table>
<thead>
<tr>
<th>用法</th>
<th>形式</th>
<th>CWPC</th>
<th>NUCC</th>
<th>CEJC</th>
<th>計</th>
<th>%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>連体修飾</td>
<td>無理な</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理に</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>副詞</td>
<td>無理無理</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>0.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理なく</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>0.9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>名詞</td>
<td>無理+格助詞</td>
<td>0</td>
<td>14</td>
<td>5</td>
<td>19</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+副助詞</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.2</td>
</tr>
<tr>
<td>動詞</td>
<td>無理する</td>
<td>5</td>
<td>11</td>
<td>8</td>
<td>24</td>
<td>5.5</td>
</tr>
<tr>
<td>述語</td>
<td>無理+copula</td>
<td>15</td>
<td>147</td>
<td>99</td>
<td>261</td>
<td>59.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+modality</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>2.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理+終助詞</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td>17</td>
<td>3.9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理</td>
<td>4</td>
<td>22</td>
<td>14</td>
<td>40</td>
<td>9.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0.2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理無理</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理無理無理</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>0.5</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理無理無理無理</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0.0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>応答表現</td>
<td>無理</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td>17</td>
<td>3.9</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理</td>
<td>0</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
<td>2.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理無理</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>1.1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>無理無理無理無理</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>意味・用法不明</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0.2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>33</td>
<td>248</td>
<td>158</td>
<td>439</td>
<td>100.0</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
(10)は副詞用法、(11a)から(11e)は応答表現の用法の例である。

表4において応答表現に分類したものは、(11a)・(11b)のように、発話境界を示す「#」の間の「無理」の単独もしくは反復形式である。ただし、CEJCの表記には句読点が用いられていないため、(11b)・(11c)のような句読の有無は区別せず、ともに「無理無理」として集計した。

また、上記の分類原則を厳密に適用すれば、(11d)「#うーん。#無理。#」の「無理」は応答表現、(11e)「#うーん、無理。#」の「無理」は非応答表現ということになる。このような境界例は非常に多く、表4の数値は暫定的に、「えー」「うーん」といったフィラーなどを含むものも応答表現に含めて数えた16。

(10)  #なんかあの昔は女隷使って無理無理働かせてなんか王さまの懐で建ててきたとかやくうんでたけど#

【出典】CEJC, 会話ID: T001_014 話者ID: IC02_師匠, 45-49歳, 男性

(11)  a.  F059  #で、お姉ちゃんと今日話ししてみて。#
      F043  #無理。#
      F059  #どうして？#
      F043  #わかるけど。#
      F059  #会えて話して。いい？#

【出典】NUCC, 会話ID: data085, 発話者ID: F043, 10代後半, 女性17

b.  IC01_直也  #背筋とか伸ばしてないだいじぶ
      IC03_永井  #だいじぶだいじぶ
      IC02_みっちー  #意識しますもうちょっと
      IC01_直也  #え eks無理無理#

【出典】CEJC, 会話ID: T002_020, 話者ID: IC01_直也, 40-44歳, 男性

c.  F037  #で、先生どこ移れば？
      F128  #移れない。移れない。#
      F037  #なんで？#
      F128  #無理、無理。#
      F037  #あ、そうなんだ。#

【出典】NUCC, 会話ID: data098, 発話者ID: F128, 20代前半, 女性

d.  M033  #それに関する言葉をね、でたらめな使い方にいっぱい入れておけばねえ#
      F001  #無理。#
      M033  #なんで。#
      F001  #無理だよ。#
      M033  #だからなんで。#
      F001  #うーん。#無理。#

16「フィラー」は、コーパスで「感動詞-フィラー」のタグが付与されているものとした。
17 理解しやすさのため、話者交代などコーパス本文に補足する。話者情報は、下線部の発話のものである。
【出典】NUCC, 会話 ID: data046, 発話者 ID: F001, 20 代前半, 女性
e. F10E  #これ無理ですねね。
F10A  #うん。
F10E  #ぜったい、無理ですねね。
F10A  #うーん、無理。
【出典】CWPC, 会話 ID:F10Q141, 発話者コード: F10A, 42 歳, 女性

(12) a. F004  #私も将来生むときさー、2人目のつもりで1人目を育ててみたい。
F019  #そりゃ、無理だよ。
【出典】NUCC, 会話 ID: data051 発話者 ID: F019, 20 代後半, 女性
b. IC03_龍之介  #俺あの辺は#
IC01_徹  #あ消えちゃったよみたいな感じだもん#
IC03_龍之介  #そう#あの辺は絶対無理#
IC02_大場  #うん#
【出典】CEJC, 会話 ID: T010_004 話者 ID: IC03_龍之介, 20-24 歳, 男性
c. M013  #思い切って教室開けば？#免許別にいらんのやろ。
M011  #そんなもん、無理無理。
M013  #なんで。
【出典】NUCC, 会話 ID: data116 発話者 ID: M011, 20 代後半, 男性
d. IC02_紀子  #ダそろそろまた間違えないかなと思って待ってるんだけど#
IC03_晴美  #そりゃ無理無理無理無理無理#
【出典】CEJC, 会話 ID: T003_021 話者 ID: IC03_晴美, 45-49 歳, 女性

また、(12)は述語用法の例であるが、機能は応答表現と変わらず、準応答表現とも呼べるものもある。 (12a)は copula を伴うが、(12b)・(12c)・(12d)は裸の形式である。 (12b)のように単独であれば copula を補うことも可能であるが、(12c)・(12d)のような反復形式は copula の脱落・省略とは考えにくく、応答表現の用法と連続的と言えることができる。

このような応答表現・準応答表現・非応答表現の連続性は、応答表現の出現の契機を示唆するものであるかもしれない。他のコーパスやデータベースの用例も収集し、分析の精度を高めてゆく必要がある。

6. 考察
ここまでの調査結果からは、「無理」の(2)～(5)のような意味・用法が本格的に出現し、拡大した時期は現代と言える。詳細に関する結論はまだ出せないが、若千の考察を加えたい。
表 2～4 を見ると、「無理」の裸の形式は、「無理+無助詞」「複合名詞」「副詞」「述語」「応答表現」で使用されている。
副詞用法の「無理」の裸の形式の増加は、近年注目を集めている「結果」「基本」「原則」などの漢語名詞の語用論的標識化と関連するかもしれない。これは、「その結果として」「基本的に」「原則として」といった表現の文法的機能を担う部分が脱落して用いられるようになり、その形式が対人的かつテキスト的機能を担うようになる現象である。語用論的標識として用いられる表現の歴史をたどると、実質的意味を持つ単語・句・節などに由来するものが多いことがさまざまな言語で報告されている。「無理無理に」から「無理無理」へ、
「無理やりに」から「無理やり」への変化も、軌を一にすると言えるだろう。
さらに、「無理無理」などの反復形式の増加もまた、近年盛んに見られる現象である。類例として、「都度都度」(北原編2011)、「ほほほほ」(野口2016)、 「あるある」「いるいる」(鈴木2016、Ono and Suzuki 2018)などが挙げられる。「都度都度」「ほほほほ」は副詞、「あるある」「いるいる」は本表でいうところの応答表現である18。こうした反復表現の機能には、強調や感情の共有などがあり、語用的標識の特徴を示していると考えられる。
応答表現の「無理」がどのような過程を経たものであるかは現時点では不明だが、裸の形式の副詞用法や述語の「無理だ」などからの文法的接辞の脱落による変化である可能性は小さくないのではないだろうか。詳細な分析は今後の課題である。

7. おわりに
本発表では、漢語名詞「無理」の歴史を、複数のコーパスを用いてたどった。その結果、文法的接辞を伴わない「無理」の裸の形式や「無理無理」などの反復形による、断り・不承諾の意味を表す応答表現としての用法は近代までは見られず、観察されるようになるのは現代に入ってからのことであることがわかった。
今回の調査は、形式・用法の変化をたどるにとどまり、意味変化まで追えなかった。(4)の例としては(3c)のようなものがあるが、(5)のようなプラスの意味の例は見出せていない。
今後さらに調査対象を拡大し、用例を精査することにより、漢語名詞の語用論的標識化をめぐる課題を明らかにしていきたいと考える。

謝辞
本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究(C)「英語破格構文の歴史的発達と語用基盤性について－構文的時間的・空間的拡がり－」(研究代表: 柴崎礼士郎、課題番号: 19K00693)、同「漢字文化圏における漢語の語用論的標識化」(研究代表: 高橋圭子、課題番号: 20K00650)の助成を受けている。

参考文献
(http://doi.org/10.15084/00002589 よりダウンロード可能)
北原保雄(編) (2011)『問題な日本語その4』大修館書店
現代日本語研究会 編(2011)『合本 女性のことば・男性のことば(職場編)』ひつじ書房
三枝令子 (2013)「名詞から副詞、接続詞へ」『一橋大学国際教育センター紀要』4, pp. 49–61.
(https://doi.org/10.15057/26706 よりダウンロード可能)
椎名美智(監訳) (2020)『新しい語用論の世界』研究社 Jonathan Culpeper and Michael Haugh

18 鈴木(2016)は「反応表現」という語を用いている。本発表のいう「応答表現」と鈴木(2016)のいう「反応表現」には相違点もあるが、本発表の議論に関わる範囲ではほぼ同義と考えられる。


**関連 URL.**

アナウンサーズ 日本語研究室 https://www.tv-asahi.co.jp/announcer/nihongo/lab/bo.html
コーパス検索アプリケーション『中納言』 https://chunagon.ninjal.ac.jp/
国立国語研究所コーパス開発センター https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/
Japan Knowledge Lib https://japanknowledge.com/library/
『日本国語大辞典第二版』『デジタル大辞泉』『角川古語大辞典』
Weblio 辞書 三省堂 大辞林 https://www.weblio.jp/cat/dictionary/ssdj